

Title	『阪大日本語研究』9号（1997）要旨
Author(s)	
Citation	阪大日本語研究. 1997, 9, p. 143-148
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6879
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

プロセスとしての習得の研究

J. V. ネウストプニー

キーワード：言語習得、言語管理、言語におけるミクロプロセス

日本語の習得の考え方は変わりつつある。どのようなものが習得されたかというよりも、焦点が習得のプロセスに移り、習得を談話の中で「捕まえる」必要があるという意識が生まれてきたのである。本稿では、習得のプロセスを談話の中で研究するさい、どのような段階を考慮に入れるべきかが問題になっている。このためには、言語管理のモデルが使われ、(1) 逸脱、(2) 留意、(3) 評価、(4) 調整計画と(5) 遂行の段階が特定され、それぞれの代表的な問題が討議されている。

韓国語話者による日本語倒置疑問文の イントネーション

— 上昇の形式とその習得パターンをめぐって —

土岐 哲・金 秀芝

キーワード：倒置疑問文、イントネーション、文末上昇形式、習得パターン、
韓国語話者

とくに文末上昇を伴った疑問文(WH/YN)のイントネーションを考えた場合、少なくとも日本語では「疑問を表す文末上昇は1文に1カ所」を原則とする。

ところが、韓国語話者がこの種の日本語文を発音すると、2カ所に明ら

かな上昇の観察されることがある。これらの現象に着目して調べた結果—日本語では、倒置疑問文になっても、倒置前の文末上昇がそのまま前半部の位置に移動し、倒置後の文末に上昇イントネーションが実現されることはない。しかし、韓国語の倒置疑問文では、倒置後の文末にも上昇が実現され、1文中で2カ所上昇することも可能である。この現象は、ソウル以外の方言話者の場合にも観察されるが、これらの人々が日本語を話した場合、この傾向が頻繁に転移され得る。

また、日本語では、倒置の有無にかかわらず上昇を伴わない場合もあるが、韓国語では、このような場合、上昇ゼロの他に、倒置後の後半部だけが上昇する場合もあり、それがまた日本語を発した場合にも現れる。

事例研究についての一考察

由井紀久子

キーワード：事例研究，一般化，科学性，日本語学習者言語研究

事例研究は科学性の観点からその妥当性について十分な認知が得られない場合もある。本稿は日本語教育学における事例研究を考察するために、雑誌『日本語教育』の5年分の論文を調べ、研究対象としての事例の選出の過程とデータ処理と分析の過程を中心に扱い、事例研究の意義と問題点を再考したものである。事例研究は典型的には少数のインフォーマントを縦断的に調査すタイプのものだと思われるが、定義の難しさも含まれており、便宜的に15例以下のものを取り上げた。データの選出は自分の勤務先の学生等が多いことが分かったが、カテゴリーの代表性という点から安易な属性記述に陥らないよう注意が必要であること、また、少数例を定量的に扱う場合、妥当性の観点からデザインの吟味が必要であることを指摘している。定性的研究は数は少ないものの詳細な観察が重要であることも指摘した。科学性との関係から、妥当性をどのように考えるかについても扱

っているがその研究が帰納推論的に結論を導こうとしているのか、あるいは仮説推論的であるのかによって外的妥当性の重要度はかわってくる。脱近代科学的な観点から仮説的推論に応用できるのではないかと示唆している。

階層性から一律化へ、そして標準化へ —五箇山親族呼称の60年—

真田 信治

キーワード：五箇山方言、親族語彙、社会意識と言語交替

富山県五箇山方言を対象として、その親族呼称の交替（shift）の様相を、60年前（1935年）、30年前（1965年）、そして現在（1995年）に時点を定めて具体的に記述した。そして、その変化の背景に、戦前の階層性、戦後の一律化、そして現在の標準化といった、地域の人々の社会的意識が強く関与していることを明らかにした。

旧南洋群島に残存する日本語の 動詞の文法カテゴリー

渋谷 勝己

キーワード：第二言語の維持 パラオ 単純化 動詞の文法カテゴリー

本稿は、現在、パラオ共和国の老年層に維持されている日本語の、動詞の文法カテゴリーを分析するものである。考察の結果、(1)肯定否定といった必要度の高いカテゴリーは全員が維持しているが、余剰性の高い部分に

は様々な単純化が起こっていること、(2)単純化は、具体的には、(i)丁寧体を使用しないといった文体面での単純化、(ii)文末詞を使用しないといった談話管理面での単純化、(iii)マセンのかわりにナイデスを使う、蓋然性を表すのに副詞キットを使うといった分析的な表現の使用、(iv)様々な定型表現の使用、(v)受け身や使役などの複雑な構文の回避などとなって現れていることを指摘した。

日本語におけるスタイル切り替えの習得段階 — ブラジル人就労者の例 —

エレン・ナカミズ

キーワード：自然習得，学習，普通体・丁寧体，方言・標準語

日本語における自然習得の研究はまだ初歩の段階にあり、最近になってその必要性が指摘されるようになった。

本稿は日本在住ブラジル人就労者を対象とし、とりわけ自然習得でのインプットが既に進んだ時点でボランティア団体が営む日本語教室で学習を受けはじめた人のスタイル切り替えの習得について考察する。

職場でのみ日本語を使用してきたブラジル人はボランティアと接すること及び学習することによって、「職場内」と「職場外」、それぞれのスタイルに対する意識が形成され、それぞれを使い分けるようになることが観察できる。実際の使い分けは主に「普通体」と「丁寧体」の切り替え、また「方言」と「標準語」の切り替えに見られる。

「職場内」では、いずれの話し相手に対しても普通体と方言形式の使用が多く、言語的なアコモデーションが生じていると思われる。一方、「職場外」では、一般的に「丁寧体」の使用が増えるが、話し相手との心理的な距離によって、「普通体」の使用頻度が高くなる。つまり、「職場内」の場面と異なり、話し相手によって切り替えが行われていることが観察で

きる。なお、方言形式は「職場外」では出現しない。

断 定 を め ぐ っ て

仁 田 義 雄

キーワード：断定，推量，確認，確信

本稿では、従来さほど十全に考察の加えられることのなかった断定について、推量との関係をも考慮に入れながら、論述したものである。断定を、事態の成立・存在を疑いのない確かなものとして捉える、といった言表事態に対する認識的な捉え方として特徴づけ、その中に、事態が感性的な経験や記憶の中に直接与えられている〈確認〉と、推論・思考・想像の中に事態を捉えた〈確信〉とを設定し、その一類である確認をさらに〈感覚器官による直接的な捕捉〉と〈既得情報〉とに下位類化し、分析・記述を施した。さらに、その各々が有している特徴を抽出した。

名詞の内在的特徴が照応に及ぼす影響についての一考察

庵 功 雄

キーワード：間接照応，関係づけられ度(DOR)，1項名詞，0項名詞，
語彙的結束性

本稿では、これまであまり考察対象とされてこなかった名詞の統語的・意味的特徴について考察した。

名詞は、自らの外延(指示対象)を決めるために他の名詞句へ依存する度合い(「関係づけられ度(DOR)」)という観点から分類すると、まず統語的にノ格を項として義務的にとる「1項名詞」とそうではない「0項名詞」に大別され、1項名詞のDORは極大である。一方、0項名詞の中では、「衣服」や「生産物」のDORは高く、「所有物」や「人名詞」のそれは低い。このDORにおける階層的関係は、他の統語現象としては例えば間接照応の許容度の違いに反映している。即ち、「1項名詞」や「衣服」のようにDORが極めて高いものでは「その」による間接照応も「ゼロ」によるものも可能だが、それよりややDORが低い「生産物」では「ゼロ」は困難になり、それよりもさらにDORが低い「所有物」や「人名詞」では「その」も「ゼロ」も不適切になるのである。

本稿の考察は、間接照応を「推論」といった運用論的な概念ではなく、より統語論的、意味論的な概念によって説明しようとする試みであると同時に、「語彙的結束性」という概念を明確にしようとする試みでもある。